

# コミュニケーション学博士論文紹介

2004年度は、コミュニケーション学博士号が3名に授与された。論文博士1名と課程博士2名である。

論文博士は第1号であり、本学の名誉教授である香内三郎先生の『「読者」の誕生—活字文化はどのようにして定着したか』（2004年、晶文社）に対して与えられた。香内教授は1963年4月から1985年3月まで東京大学新聞研究所で教鞭をとった。その後、1985年4月から東京経済大学に移り、2002年3月定年により退職されている。

課程博士第3号は朱磊君の「中国における広告の伝統」であり、第4号は陳立新君の「梁啓超のジャーナリズム精神史研究」である。

以下において、それぞれの「論文内容の要旨」と「審査結果の要旨」掲載する。

## 「読者」の誕生

香 内 三 郎

### I 論文内容の要旨

『「読者」の誕生—活字文化はどのようにして定着したか』

近代資本主義的生産様式が支配的になる時期と、「市民社会」が形成されて行く時期とは、かなり重なり平行してはいるが、必ずしも同じではない。現代にまで連続する世俗的「市民社会」の形成過程は、イギリスにあっては、ほぼ十七世紀、十八世紀の長い時間にわたって推転するものと思われる。活字文化の形成・定着である。宗教の世俗化が進行し、イギリスでは国教会の威力がおとろえ、かわって多種多様な「道徳論」（アダム・スミスの『道徳感情論』がその一つの終着駅である）が盛行し、啓蒙期に結晶してゆくのが、その一つの徴表である。本書に収めた各論文は、この前半の過程、イギリス・ピューリタン革命をはさむ十七世紀における、近代的コミュニケーション、メディア、読者、の誕生、それを可能にした意識・思考・状況の変化を分析したものである。

そうした課題に接近するためには、ベーコン、ホップズ、ロックなど頂点的「哲学者」の言語・コミュニケーション論を抽出・分析してゆく方向、あるいはコミュニケーションのな

かのレトリック、人間の内部での想像力の位置づけなどを検討して行く方向もある。そのほうが、オーソドックスかも知れない。

が、歴史の実態過程に密着するため、とかく抽象的次元に傾きやすい、この方向のアプローチを、ここでは基本的にとっていない。代わりにと言うわけでもないが、近代に入っのテキストの「読みかた」推移に焦点をあててみた。もとより「読みかた」も、ここで完結するわけではなく、十八世紀、初期の「批評」理論でさまざまに分解し、そのままロマンチズムへ接続するわけで、まだほんの糸口に過ぎないが、有効な入口ではないかと思っている。

基本的には虚空に消えてしまう日常コミュニケーションの世界は、会話から「ことわざ」が消えて行く過程など若干言及してはいるが、なかなか方法論的にそれ自体「対象化」することは難しく、その一側面だけを、「カズイストリー」(“Casuistry”)の時代による内容変化と、そのメディアがらみの「政治的言語」への転化を、追跡するにとどまった。より一般化して言えば、「活字」「テキスト」の世界を超えた、底辺民衆の世界への下降は、いくつか試みたが余りうまくはっていない。

以下、各章、論文の要旨を簡単に記述しておく。

## [I], (1). 「アイコン」「イメージ」論争の歴史的意味——近代開幕期における影像と言葉

アイコン (“Icon”), より一般的に影像・イメージについて、すべての典拠となった聖書には、それらの全面禁止と、ある程度の容認と、相矛盾した記述が並存している。そこを起点として、東ローマ帝国におけるイコノクラズムとアイコン復活との連続・交替、宗教改革期における激しいイコノクラズム運動が生れた。この章では、「アイコン」がそれ自体ではなく、それが置かれている政治・社会状況の函数として問題となる過程を叙述すると共に、東ローマ帝国を吹き荒れた「アイコン」論争では、とくに影像・イメージの位置づけに注意してある。

フランセス・イエイツ女史の開拓した「記憶術」(“art of memory”)の展開は、ヨーロッパ文化の理解にとって、まだ判らないことが多いが、極めて重大な課題である。ここでは、「記憶再生」方法、その拡大化過程を辿り、「記憶術」が消滅して(そのごく一部しか扱えなかった)、新しい「読みかた」に接続・融解して行く地点を探ろうと試みた。

宗教改革期のイコノクラズム運動に、どういった根拠づけの「理論」が構成されたのか、そのいろいろな様相は、それなりに検討されなければならない。が同時に、一部のプロテスタント世界では、イコノクラズムの、目にみえる外的対象がなくなった時、その運動志向は、とめどなく内面化して行く。その流れの一半は、「イメージを浮かべない」読みかたに収斂して行くと思われるが、主流はピューリタン革命で極点にまで昇りつめ、自己破裂して四散してしまうのではないか、というのが私の大体的見取図である。

## [I], (2). 聖書の「四つの意味」とその解体——「字義通り」の読みの優位

## (3). 「近代的」読み方の誕生——読むことの効力測定様式

聖書の読みかたを、どこまで一般的に拡大してよいかは問題であるが、その中世末に確立した四通りの「読みかた」(literal, allegorical, tropological, anagogical)を、宗教改革の思想家たちは、「字義通り」の読みかた一本にしぼって行く。「近代的」読みかたの開始線である。

クリストファー・ヒルのいう、誰でもバイブルだけは読む、ピューリタン諸セクトの「聖書文化」の渦中で、その伝統的な読みかたになっている「アレゴリカル」「トロポロジカル」な解釈様式が全面復活し、頂点に達し、解体して行く。そのプロセスを、ディガーズ("Diggers")・ウインスタンリー、ランター("Ranter")・コップの行動の動因となる意識、活動の分析を通して示そうと試みた。

読みかたの「現在」に関しては、ガダマー以来のヘルメノイティック("Hermeneutics")の系譜を扱うべきであろうが、抽象度の高い論議は、この文脈では生産的とは思えず、より現実の「解釈」「批評」に近接し、また物語りの原型としての聖書を分析しているフランク・カモードの仕事を吟味して、現況解明の一端とした。

この世紀にあって、「聖霊」が地上に降りてくると「大脳生理学」となり、脳のメカニズムから「読み」の構造を、解明しようという話になる。その「生理」還元主義の形態は、一応略述したつもりだが、この世紀の「身体(肉体)」論については、ウィリスの仕事もふくめて、更に分析を全面化する必要があるだろう。

## [II], (1). 「週刊」新聞の社会的定着——定期性をもったジャーナリズムの出現

## (2). ピューリタン革命の「言説」空間——ライターの想定した読者像とその論理

この章は大きくみて「新聞」を扱った部分と「パンフレット」を取り上げた部分と、2つにわかれる。社会状況、それに対応した意識の変化とが週刊「新聞」というメディアに結晶して行く様相、とくにドイツ新聞学以来慣用化している「定期性」が、読者の意識にあたえただろう変化を考察した。

新聞というメディアを、ほぼ社会的に定着させたと思われるピューリタン革命の過程は、始めから終わりまで思想の変らない王党派のバークンヘッドと、何度か思想が転移するネダムという対照的党派ジャーナリストをとり上げ、その対比軸から見えてくる問題群を吟味してみることにした。一つ浮び上ってくる問題は、かれらの新聞言論が「味方」の士気をたかめ、「敵」をおとしめると同時に、どう「中間派」、——革命期には非常に規定しにくい——を割る戦略をもっていたかということである。その言論戦略は、当然に当時の「政治理論」と深くからみ合っており、メディアのつくり出すものも含めたその諸「理論」は、教科書風単純化をこえて、より細かに再検討されなければならない。

字が読めず、酒場などで他人の読み上げるのを「聞くパブリック」もふくめて、文章の理解力には大きな差があり、なによりも、日常生活のなかで「活字」に接触することが習慣化

していない。この大海のなかに、なんとか一本の道をつけようとするライターの、ほとんど無数といってもよい集約的努力が、多少とも恒常的な「読者」を誕生させたものと思われる。この複雑、膨大な全過程をそのまま視野におくことは出来ないのだから、ここではパンフレットのライターが、どのような「読者」を想定しているか（逆にいえばライターがどのような仮面をつけるか）を、方法的軸にして追求してみた。

ジョン・ミルトンをえらんだのは、かれがパンフレット・ライターとしてどの程度代表性があるのかは問題だが、私がよく知っており、扱いやすいという以上の意味はない。ただその過程で、伝統的に多く神話の雲に包まれて来た、『アレオパジティカ』の論理構造をややくわしく解析できたことは、一般の「神話」がそれで消えることはないにしても、よかったのではないかと、思っている。権力の末期になるにしたがって、ミルトンの想定読者が急角度に大衆化してゆくのは、歴史のアイロニーというほかはない。

### 【III】、(1)。「手書き」論文から「活字」の世界へ——ホップズの二つの論争と論証の方法

王政復古期以降、聖書の「創世記」を読みかえて、「アダム以前に人間はいる」(“Pre-Adamite”)という議論が、さすがに出版はされなかったが手書きの草稿で、「科学革命」のセンター、王立協会の内部で熱心に議論されていたように、この時期の思考は、矛盾に満ちた迷路を通って行く。後世の眼から見れば、一見不可解な状況を現出する。それをまず、前提しなければならぬ。本章は主として、そのパラドックスの分析にあてられる。

「アダム」の能力を回復しようという努力が、望遠鏡、顕微鏡を生み、「実験」を促進するという矛盾。「アダム」の言語を再現しようという探求が、ロンドン『ポリグロット・バイブル』の刊行にいたり、東方諸言語の「科学的」研究へ転換してゆくメカニズムを、ここでは解明しようとした。錯綜した糸をあらかた、きれいに解きほぐしているとは思わないが、その大きな枠組みだけは明らかに出来たのではないか。

長い間、ヨーロッパ世界を支配して来た巨大な思想体系、キリスト教が解体（これまでとは別次元に転位）してゆく過程を見るには、視点を内部に限らなければならない。それは内部からしか、崩れなかったからである。

ホップズとブラムホール主教との「自由意志」「人間の自由」についての論争は、カルヴィニズム、ホップズの機械論とアルミニズムの対決といったやや単純な判決ではなく、この解体の一環、同時に歴史進行のメカニズム、そこにおける人間行動の役割を、多角的に吟味しなければならない。

また、この時期「肉体」と「魂」の関係、あるいはその結合状態が問題であるわけだが、ミルトンとホップズという全く異なった様相を呈する思想家が、「モータリズム」(“mortalism”) 異端思想で共通している、錯雑した状況の一端を明らかにしようと努力した。別な回答群が地平線に姿をあらわすのは、もう少し先の時期、世紀をこえなければならない、

と思われる。

### 【III】、(2). クロムウェル治下における「寛容」の限界——ジェームズ・ネイラーの「プリストル入城事件」

クエイカーとその運動は、ピューリタンの一面の論理の最後の地平までの徹底化といってもよいが、ほとんど聖書の「文字」を否定する限界まで行く。かれらは日常生活で、独自のコミュニケーション「観」を実践すると共に、一見矛盾するようだが、運動面では活潑な「パンフレット」を使っての言論活動を行った。この構造が分析されなければならない。

ついで本論文は、一時期フォックスと並ぶ運動のリーダーだったネイラーの「プリストル入城事件」——妄想につかれたネイラーが自分をキリストだと思い、その行為をまねたとされる——が瀆神罪に問われ、議会で審議される過程を検討・分析した。

ネイラーの行動の意図、意味づけを、どう「解釈」するかによるのだが、この「事件」が、クロムウェル体制下における、言論・思想の「自由」の置かれていた境界線を示している、と思うからである。この「事件」を契機にクエイカー運動は、体制の枠内に「許容」される存在に転進して行くのではないか。

### 【IV】、(1). イギリスにおける「カズイストリー」の運命——近代ジャーナリズム成立論史序説

#### (2). 「仮面」の操作と「言論」主体の成立——ケース神学の世俗化と近代ジャーナリズム

本来、「ウソをつかない」話法、特定のコミュニケーション様式として考案・構成されたものが、中世から近代にいたる過程で、ある種の、尊敬すべき「科学」としての地位を獲得するにいたる。それが宗教的迫害時代のイギリスで全く正反対の「ウソ」「ごまかし」の技術としてどう民衆イメージに定着して行くかを、“Gunpowder Plot”（今に至るも激しい論争の続く政治的・イデオロギー的怪事件）の経過分析と共に辿ってみた。付言すれば、ここでは、シェークスピアを、「かくれ」カトリックとして扱っているが、それには激しい反対論もあり—作品のなかにその影がないというのが基本理由—そこに象徴されるように、本論文では、かなり競合するいくつかの「事実」について、そのどちらかの立場（解釈）をとっている。

「カズイストリー」の伝統が近代社会でどこへ消えてゆくのかは、大きな問題である。ここでは、それが、その一つの流れといった方がよいか、「政治的言語」のなかへ転化して行く軌跡を分析した。「エクイヴォケーション」(“equivocation”)などのコミュニケーション技法は、その後のヨーロッパの政治・外交話法に、深部で大きな影響をあたえていると思うが、その全面的検討は、今後の課題である。

「カズイストリー」の運命と関連はしているけれど、もう一つの文脈、問題設定へ移ろう。始めに一つことわって置かねばならぬことがある。

王位が放棄されて「空になった」という、誰が見ても不自然な政治的フィクションを起点とする、多様な名誉革命「正統化」論の競合は、もっと追跡さるべきではあったが、ここでは一種の問題提起にとどまった。名誉革命にいたる歴史過程（「排除法案」をめぐる猛烈な言論戦をふくむ）の分析、叙述とあわせて、他日を期す以外にない。この構成では入らなかったが、十七世紀後半の部分では、欠けているところである。

近年の研究によるとウィリアム三世の時期から十八世紀にかけての選挙に、現代風に言えば、かなり「浮動票」が多く、それだけパンフレットによる言論ジャーナリズムの効力は、従来想定されて来たよりも大きいと思われる。ここでは、代表的ジャーナリストとして、ダニエル・デフォーを取り上げた。「話者」を假構し、設定した「話者」になりきって視点を自由に移行させることが、近代ジャーナリズム成立の一必要条件だとすれば、ここで追求されているデフォーの多彩な言論活動は、そのことを十分に実証していると思う。

なお、デフォーの小説が、人間、こういう状況におかれた時、どう行動するか（すべきか）、という「カズイストリー」の応用だという見解は、そのまま全面的に採用することは出来ないにしても、「カズイストリー」がフィクションの世界、小説に流れ入って行く文脈は、もう少し検討すべきだと考えている。「ロビンソン・クルーソー」が近代的人間の成立を反映しているという神話が崩れかかっている現在、この再考による新しいパラダイムの設定は一層必要であろう。

## II 審査結果の要旨

### 博士学位請求論文審査報告

#### 「読者」の誕生

香内三郎，博士請求論文『「読者」の誕生——活字文化はどのようにして定着したか——』（2004年12月10日，晶文社，本文534頁，索引等15頁）

本論文は、次の4個のパーツ、9本の独立した論文で構成されている。

#### 第I部

1. 「アイコン」「イメージ」論争の歴史的意味——近代開幕期における影像と言葉。
2. 聖書の「四つの意味」とその解体——「字義通り」の読みの優位。
3. 「近代的」読み方の誕生——「読むこと」の効力測定様式。

#### 第II部

4. 「週刊」新聞の社会的定着——定期性ともったジャーナリズムの出現。

5. ピューリタン革命の「言説」空間——ライターの想定した読者像とその論理。

### 第 III 部

6. 「手書き」論文から「活字」の世界へ——ホップズの二つの論争と論証の方法。  
7. クロムウェル治下における「寛容」の限界——ジェームス・ネイラーの「プリストル入城事件」。

### 第 IV 部

8. イギリスにおける「カズイストリー」の運命——近代ジャーナリズム成立論史序説。  
9. 「仮面」の操作と「言論」主体の成立——ケース神学の世俗化と近代ジャーナリズム。

この9本の独立した論文のうち、5本の初出は本大学の紀要に執筆した論文である。

本論文は、著者が「あとがき」で述べているように、17世紀全般のコミュニケーション状況を検討する予定で設計されたものだが、「結局、1640年から1660年のピューリタン革命期の言論・メディア状況が主軸」になり、名誉革命後のウィリアム体制までが分析されている。

香内には、すでに『言論の自由の源流』（1976年、平凡社）、『活字文化の誕生』（1982年、晶文社）その他の論文で、この前後の時期のコミュニケーションの歴史についての、理論的な考察がある。今回の論文は、ピューリタン革命以降、名誉革命を経験する17世紀イギリスにおいて、活字媒体が、いかにコミュニケーションの基底になっていったかを描いたものである。香内が、すでに研究しているJ. ミルトンらの著述や新・旧約聖書の行間を注意深く読みこみ、人々が「読む」という習性をどのように身につけ、「読者」がいかに出現したかを解明した。

つぎに、各パートについて審査経過を述べたい。

第I部の3本の論文のうち第1論文は、「アイコン」（聖・画像）を破壊するイコノクラズムとよぶ「暴動的な」民衆運動に焦点をあてる。これは「視覚文化」と「活字文化」への移行過程の中のダイナミック意識形成である。片や偶像禁令の伏線があり、一方ではかたちを「読む」（Literacy）ことへの導線がある。「いかなるものの形（カタチ）も造ってはならない」（『出エジプト記』）を前提に「職人の手の業にすぎぬ」イメージの像、また不可視の神を、どうやって「イメージ」に再現できるのか、それらは結局、聖書等をどう「解釈」するかの問題であり、ここから香内は「読み」の問題とする本書の導入路を拓く。

「読み」の相違が、対立、抗争、大規模な相互の虐殺行為に発展し、いずれかが力尽きるか、第三者の介入等の「読み」に無関係な力が働くかしなければ終着しないことは、聖書に限らずあらゆるドグマやマニフェストに広く見られる民衆運動の悲劇的結末であることへの香内の思いがある。この「教義」上の相違が、軍隊から下層民まで動員できる「政治的シンボル」になることをどこまで理解していたかは不明だが、アルタバスドウスは、権力奪取を主

目的に「アイコン」の復活を果す。コンスタンティノープルに「アイコン」がたちまち充満する。しかし「アイコン」の未曾有の「政治化」は長続きしたわけではない。

「アイコン」、「イメージ」は人々の教化に一定の役割を果す。「教会の壁にかざってある絵は、読めない人」への教化に役立ち、ステンドグラスも、絵画もたんなる装飾ではないわけだが、ここで「本が読める」と、すなわち「リテライト」とは、ラテン語が読めるということであり、大部分の民衆には無関係のことだが、「書かれた」ものを「読む」という新しく根本的な問題が立ち現われたことにちがいない。

「読む」ことの出現とならんで、「民衆の教化」に役立つ絵画、イメージのコピー、あるいは、「なにか類似（“a likeness”）したもの、あるいはモデル、あるいは象徴」（39頁）が問題になる。これは、パース、モリスらのアングロ・アメリカンの流れを汲む「記号論」（semiotics）の原像たるアリストテレスの「記号学」流とストア学派の「記号」の典型がロゴス（言葉）であるとする理論との間を埋める壮大な「記号論」の試みを読み取ることができる。香内は、ヨハネの言葉を借りて「人間はふつう、中間媒介なしに神の直接コミュニケーションを受け取ることはできない。」ため、かれは「イメージ」の階層分類をつくり、型の分類を始めた。再び「アイコン」が浮上するように次第に、「心に描く像（絵）」が、「言葉」（言葉を聞くこと＝説教）への優位が確立してゆく。

第2論文は、「聖書の『四つの意味』とその解体——『字義通り』の読みの優位」では、教会における聖職者の説教に対する聖書の「読み」の優位性が次第に確立してゆく。とくにピューリタン革命の昂揚期には、聖書の多様な「読み方」が隆盛をきわめ、そこからさらに、人間の心の奥の思い、内面的な枠組みと交錯した「自由勝手に読む」という近代的な「読み方」への過程を形成する。「読み方」を解釈し、批評し、改変してゆく「権利」の自我である。

第3論文の「『近代的』読み方の誕生——『読むこと』の効力測定様式」が、この第2論文に当然接続される。

「近代的」読み方は、もちろん聖書に対してだけでない。「読み物」から小説に至るまで「一種の記号である登場人物」への一体感、反撥感、読者に対する聖書とは異なる想像力、「批評」力、「解釈」力というエネルギーを与えた。「読者」は、勝手に登場人物、風景、ストーリー、プロットを切り刻んで、脳裏に別の「読み物」を再構築することもできるし、作者の意図と無関係に、主役の属性、キャラクターを発達させ、役割変換し、背景を延長してしまう。発した言葉や記号を、別の脈略に当てはめたり、ステレオタイプ化もできる。読者に「誤解する権利」「イメージの中で加筆、改造する能動性」を与える。意味の変換、拡張、分解は、爆発的に広がる。主役は読者である。これはまた聖書の「解釈」にも影響を及ぼす。香内はフランク・カモードの聖書「解釈」を引き合いに出し、聖書の中身だけでなく、その構造や成立に至るまで新しい「解釈」の余地を見出す。「解釈」はまさに「近代」的コミュニケーション成立の基本であり、これは「読み物」側からすれば影響の多様性であり、「良

い」影響や「悪い」影響（誰が良悪を判定するのは別として）が心配され始める。「すべての悪徳の教科書」であるパンフレット類は、絶対に見せてはならない、という風に。

しかし「多様な読み方の漸次的形成」を押し止めることはできない。17世紀初めには、F. ベーコンのように「状況と本の内容に応じたいろいろな読み方」が受け入れられてゆく。このことはまた無数の本を読まなければならないという「知識人」という「人種」を生み、ゲスナーの「本の全カタログ」、さらには百科事典の編纂へと連なってゆく。

## 第II部

### 4. 「『週刊』新聞の社会的定着」 定期性をもったジャーナリズムの出現

#### 5. 「ピューリタン革命の『言説』空間 ライターの想定した読者像とその論理」

第II部は、近代ジャーナリズム形成を根源的なところから解き明かそうとする2論文から構成されているが、特に最初におかれた「『週刊』新聞の社会的定着 定期性をもったジャーナリズムの出現」は、「『神の声』から『民の声』への移行 中世のコミュニケーション状況から『近代』へ」、「『口頭』『手書き』『活字』、三媒体の共存 手書き文化と活字文化、ニュース・レターの時期」、「定期型ニュース・メディア前史 翻訳新聞の誕生」、「始原のジャーナリスト、二人 バークンヘッドとネダム」「最底辺から見た『世界』民衆的視点とその表現媒体」の5つの章から成り、「諸媒体混合の世界から話し言葉の様式変化とあわせて、『新聞』が抜け出していく過程」をきわめて具体的にたどった労作である。

第一章「『神の声』から『民の声』への移行 中世のコミュニケーション状況から『近代』へ」は、中世における「口頭」のコミュニケーションを丹念に分析し、そこでの「標準語」と日常会話のなかに組み込まれた定型的「ことわざ」といったレベルで、口頭のコミュニケーションにおいて一定の変容が起きたことに着目する。そして、情報（「噂」「ニュース」）が、口頭から口頭へ、オーラル・コミュニケーションのネットワークを通して、伝達され、増幅され、変形されていたこと、さらにその世界のなかに活字メディアが入っていき、共存していくことを分析している。

そして、それをふまえて第二章「『口頭』『手書き』『活字』、三媒体の共存 手書き文化と活字文化、ニュース・レターの時期」は、これまでの通説のように「口頭」から「手書き」へ、「手書き」から「活字」へと単純に交替していったのではなく、むしろ共存していたことを明らかにしている。「原稿」の回覧、ニュース・レターは、一部知識人の小サークルばかりでなく、かなり「商業化」し、専門の本屋もあり、原稿「商品」が流通していることを明らかにしている。これは、新しいメディアの登場が、衰弱する古いメディアにとって代わっていくといった単純な過程ではなく、古いメディアのうえに重層的に新しいメディアが入っていき、共存する有様を描いたもので、メディアの歴史を考えるうえで、きわめて重要な示唆を与えている。

第三章「定期的ニュース・メディア前史 翻訳新聞の誕生」は、そうした共存状態の中から「定期型ニュース・メディア」が生成する過程をたどったものだが、そこでの定期性の形成を「読者」の意識変化と結びつけて考察しているところに大きな独自性がある。特に後者の問題では、リテラシーの実態に関する研究にも十分目配りをしている。

第四章「始原のジャーナリスト、二人 パークンヘッドとネダム」は、初期の週刊新聞の記者二人を取りあげ、始原に遡ってジャーナリズム、ジャーナリストがなんであったのかを考えようとしたものである。政治の激変のなかに生きる二人のジャーナリズム活動を興味深いエピソードをまじえながら、具体的に描いているが、それだけでなくジャーナリズムの文体の変化に着目しているところに著者の鋭い問題意識がうかがえる。

最後の章「最底辺から見た『世界』 民衆的視点とその表現媒体」は、ふたたび口頭のコミュニケーションのなかに生きる民衆の問題にもどり、革命という大変動を民衆がどのように認識していたのかを、「怪物」パンフレットから探ろうとした論考であるが、直接アプローチすることが非常に困難な民衆の世界に、ともすれば軽視されがちな「怪物」パンフレットを通して迫ろうとしたもので、メディア史研究・民衆史研究の方法論からみても、大変重要な問題提起をふくんでいる。

第二部の後半「ピューリタン革命の『言説』空間 ライターの想定した読者像とその論理」は、「近代ジャーナリズム」成立期の問題を扱っているが、「パンフレットの小宇宙『バベルの塔』の混乱の再現」「ミルトンの想定読者像 最初の『言論』活動と『学者』の仮面」「王制批判とミルトンの『読者』像 批判の論理構造」の三つの章から構成されている。

ここでの大きな特徴は、ミルトンなどジャーナリストについて、いわゆる思想史的な分析を加えるのではなく、その言説が想定している「読者」像を分析しようとしていることである。この「読者」への注目は本書全体を貫いており、本書の最も重要な達成であると評価することができる。

第II部は、巨視的視点にたった大きな構成と微視的な論証とが見事に組み合わせられた論考である。コミュニケーション史、メディア史という研究は、いまだ十分構築されているとは言いが、本書は、本格的なコミュニケーション史・メディア史として研究全体を大きく前進させている。また、コミュニケーション、メディアに関する深い理解に立った歴史分析は、たんなる歴史分析を超えて、コミュニケーション研究・メディア研究全体においても最も重要な成果である。

### 第III部

#### 6. 「手書き」論文から「活字」の世界へ 要旨

ホップズがカトリック理論家ホワイトおよび同教会ブラムホールと行った論争を分析し、

併せて、学者がラテン語を媒介として多かれ少なかれインターナショナル（ヨーロッパ的規模）な手紙の交流による「知的共同体」に属していた時代から、ナショナルな「活字文化圏」に入る転換期にホップズが位置していたことを示す。ホップズの論争は、ホワイト批判では伝統的な手書きの「文書」で行われ、ごく一部の知識人、学者のコミュニティに回覧されたものであり、ブラムホール主教との伝統の様式に従って最初ごく狭いサークル内での「手紙」の交換に終わっていたものが、偶然の事情で活字の世界に入ってしまう、当然のことながら問題を世間的に拡大し、様式を転形していくコースを辿った。以下、主な論点を要約する。

- (1) 原罪と「実験」科学の誕生：17世紀イギリスには、「原罪」観念から近代科学の基礎となる「実験」が出てくるといふ、逆説的コースがあったことを示す。「創世記」楽園追放物語を字義通りに読むという宗教改革者の立場に立つベーコンは経験論を展開した。アダムの墮落以来、「感覚」がその限りでは正確に外界を反映できなくなり（できるとするのはアリストテレス以来のスコラ自然哲学）、「自然」は、われわれが操作し、強制し、その一片を人工的に抽出しなければその秘密をあかさないと、「実験」科学の確立を主張。宗教改革者による「聖書」の創世記、アダムの墮落の字義通りの読みの帰結→実験による「自然」認識という方法論の誕生を論証する。

論文の残りの部分への導入として、17世紀イギリスの知的風土を紹介する意図によると思われる「読み」の歴史に関する実に面白い指摘であり、本論文の魅力の一つである。

- (2) ホワイトとの論争：ホワイトはカトリックの異端と目される「ブラックロイスト」の始祖である。プロテスタントの唯一で最高の基準は「聖書」（文字の書かれた本）、カトリックは「聖書」プラス教会の伝統・儀式で、ブラックロイストは「聖書」の権威自体を否定する。ホワイトによれば、「聖書」は俗人の理解力に合わせてつくられており、論理的につくられていない。メタファーが多用され、それを解釈するには別の権威、「教会」の伝統が必要。カトリック教会の口承伝統は使徒の口承を凝結している。

論文では、ホワイトのこの理想に対するホップズの批判が明瞭に示されていないが、他の論文で論じられているのかもしれない。いずれにせよ、ホワイトの説の紹介は「口承」と「文字」の関係（17世紀イギリスでの）を知る上で貴重な指摘である。

- (3) ブラムホール主教との論争：本論文の中心テーマは「自由意志」と「必然性」をめぐる論争である。人間に「自由意志」ありと説くホワイトとブラムホール主教の主張を、ホップズはルター、カルヴァンの思想を援用して批判。ルター、カルヴァンには俗界に関しては「自由意志」を認める傾向があるがホップズは徹底的にこれを否定し、すべては「必然」と説く。論争はホップズの「リヴァアサン」をめぐる論争に発展し、拡大。
- (4) 1654～1657年にロンドンで刊行された全6巻の多言語対訳聖書：これは、アルカラ、アントワープ、パリですでに1500～1650年に3回出版されたものにつけ加わる印刷事業である。アダムの言語を回復し、そこに戻る手段として多言語の聖書、多言語のテキスト

を対照・比較して、オリジナル・テキストを確定しようとする大事業をカンタベリーのロード大主教が構想した。しかしロード大主教が1645年に処刑され、実現しなかった。元主教で革命で地位を追われたブライアン・ウォルトンが1652年、国家評議会から出版許可を得て刊行。ウォルトンは「プロレゴメナ」で刊行の意図を説明している。その中に以下のような、「寛容」につながる興味深い思想が見られる→全ヨーロッパ的規模での現実世界の対立・混乱はテキストの異同もからみ合っているが、それと同じように「解釈」の違いも大きく作用している。多くの版の異同を明らかにする以上、多くの異なった「版」「意見」の共存を認めるという立場に立たざるをえない。聖書の中の「救済」に必要なもの、キリスト教義の核心を最小限にし、後は多少違ってかまわない。ここには「アダムの言語」を内部から解体していく要素が見られる。「聖書」のテキストの相対化への道がこうして開かれる。最初の「原罪と近代科学の誕生」と同様、実に刺激的な解釈であり、これだけを取り上げても面白い論文といえる。「活字文化」がもたらす多様で矛盾した、また逆説的な効果の一端をよく示している。本論の白眉はホップズの論争よりも第一章「原罪…」とこの「多言語聖書」の部分ではないだろうか。

#### 7. クロムウェル治下における「寛容」の限界

##### 要旨

イギリス・プロテスタント派の一派、クエーカー教徒の指導者の一人、ネイラーが1656年、キリストのエルサレム入りをまねて仲間の男女6名とともにブリストル市に入るというパフォーマンスを挙げる。市当局に逮捕、審問されロンドンに送られ、瀆神罪を犯したとして、議会で裁かれた。刑は首枷をつけられ、舌に穴をあけられ、額に烙印を押された上、三年間ブリストルの牢獄に閉じこめられるというもので、残虐を極めた。

論文はまず、クエーカー教徒の特異なコミュニケーション論を紹介し、次いでネイラーの「ブリストル入城事件」を描写。議会での処分をめぐる討議と判決に至るプロセスを検討したのち、「寛容」に関する法規およびその背景と見られる「寛容」思想に光をあてる。法規も思想も、異端的な宗派に対してかなり「寛容」だったのだが、実態としてはまだ「非寛容」の雰囲気があったことを明らかにする。以下、主な論点を要約する。

- (1) クエーカーのコミュニケーション論：聖霊を媒介として今でも神とのコミュニケーションが可能である。聖書の解釈にも「聖霊」の助けが必要、それがなければ聖書は単なる「死んだ文字」の羅列に過ぎない。聖霊が心の内部で働く、特殊な宗教的体験を獲得する手段は、自己の意思という個性性を意識から消し去って、できるだけ純粋な聖霊の通路、媒介、容器となることで、このためには「沈黙」が必須条件となる。永遠の神の言葉をそのまま理解できる「墮落」以前のアダムの言語に到達する、あるいはその状態に近接するコースが「沈黙」である。コミュニケーションのためのコミュニケーション、人を楽しませるコミュニケーションは「虚しい言」の典型であり、すべての言語芸術、芝居、言葉遊

び、歌はことごとく排除されねばならない。以上のようなコミュニケーション論は、17世紀中葉に定着しつつあった「活字文化」に対する反逆ともいえる。

- (2) ネイラーの「プリストル入城事件」：ネイラーらが逮捕されたのち、議会内にネイラー問題を扱う委員会が設置される。罪状は、ネイラーは不敬にもイエスの言動を真似た、不敬にも自らを救世主になぞらえたという二重の許しがたい「瀆神」を犯したというもの。最強硬派は、キリストを真似た行為は「神からその栄光を盗んだ」ことに他ならず、「瀆神」であるとして厳罰を要求。一方、寛容派は、ネイラーは「他の被造物よりも多くのキリストが彼の中に生きていて信じていた」「幻惑された人間」であって瀆神者ではないとした。最終判決は「瀆神」だとして厳罰。
- (3) 「寛容」をめぐる思想状況：「プリストル入城事件」以前、クロムウェルに最も信頼され、かつ最も影響力のあった聖職者オーウェンの主張→ゆるい国教会を核にして、そのまわりを、許容された各セクトの教会が取り囲む。一種の複合体が望ましく許容された各セクトには公的な礼拝、集合場所を確保し、保障してやらねばならない。この考えが1653年の「統治章典」の「寛容」条項で実現。
- (4) 「寛容」を促進する立法：1650年、「瀆神罪法」→許容できない行動を狭く厳密に規定。1652年、議会はソシニウス派ビドルの事件をきっかけにより積極的な立法を行う。国教会の出席を義務づけるほとんどすべての法令の撤回。何人も国教会の出席を拒否したからといって処罰されなくなる。ただし、条件として日曜日及び公的な祭日に「神への奉仕と祈りに捧げられる、なんらかの宗教的行事が行われる公的な場所」に出席するか、私宅でもよいが、聖書を読み、解釈し、解釈を相談する、なんらかの宗教的行事が行われる場所に出なければならない。」1653年、「統治章典」の「寛容」条項→何人も信仰内容に関しては、「説得」すなわちコミュニケーションによる努力が行われるだけで、刑罰をもって同調を強制されない。ただし、「他に害を及ぼし、治安を妨害しないかぎり」という条件がつく。クロムウェルの死後、王政復古の直前、かっこ付きの「議会」は宗教的「寛容」を促進させようとする動きを強め、牢にいた100人以上のクェーカーを釈放する。

「プリストル入城事件」の処分は、比較的に「寛容」な思想と法規が存在していたにもかかわらず、過酷である。イギリスの17世紀中葉、クロムウェルの治下における「寛容」の限界を示す事件・処分であった、というのが香内の見解かと思われる。

17世紀中葉のイギリスの言論、メディア状況を綿密に分析、紹介しており、本書のとりわけ第III部を大変興味深く読んだ。「口承」と「活字文化」、「手書きのコミュニケーション」と「活字本コミュニケーション」といった様々な側面が「聖書」を中核に論じられ、論文の構成は複雑、微妙、重層的で難解な部分がある。本書の最大の魅力は、豪華ホテルのこれまた豪華なビュッフェスタイルのディナーに似て、どれをつまんでも美味しいという点ではないだろうか。著者の博覧強記ぶりは驚異的であり、しかも、本書の随所に鋭く、

繊細な分析が散りばめられている。同時代のフランスの状況を念頭に置きながら読んだが、カトリック国とプロテスタント国という違いに由来すると思われるフランスとの違いに興味をもった。イギリスではすでに17世紀中葉に「寛容」の度合いが大きかったのに対し、フランスはプロテスタントに対してはもちろんのこと、カトリック内部のジャンセニストを迫害していたのである。コミュニケーションの歴史を研究する上で、イギリス、フランス、ドイツ、イタリアなどヨーロッパの主要な国々に関する個別研究を比較・検討する視点が欠かせない。香内氏の本書は、同時代の他の国のコミュニケーション史を研究するものにとっても、きわめて貴重な比較・検討の材料となるだろう。

#### 第IV部

第8論文「イギリスにおける『カズイストリー』の運命」では、第7論文に続く形で、近代ジャーナリズムの成立に論をすすめる。その端緒としてヨーロッパのキリスト教のなかでの「擬態」を考察する。それは原義に対するシミュレーションを考えるとわかりやすい。「嘘」という問題と重なる。宗教的・思想的迫害に対しての「擬態」、偽装転向といってもよいかも知れない。

香内は「カズイストリー (casuistry) と神義論の消滅 (あるいは転換) が、近代ジャーナリズムの基本的前提」とする立場から、カズイストリーをどこまで容認するのか、ユダヤ人と改宗した異邦人の関係、異端審問所、「隠れユダヤ教」といったことからカズイストリーの機能が成立する。たとえば「審問」過程でマニュアル化、体系化が進む。何を質問し、どう答えれば「異端」と認定するかといった形式的な一般化のようである。カズイストリーは、この「尋問」とのかかわりで構成される。カズイストリー的な本の隆盛、ある本は92版をかぞえるなど、「大衆的」規模になる。

第9論文「『仮面』の操作と『言論』主体の成立」に至って、神学の世俗化と近代ジャーナリズムの定着をみる。

16, 17世紀は、宗教改革と反宗教改革が激しく対立し、それぞれ「正統」教議を主張し、それに賛成しない者を「異端」と認定する。とくにイギリスのプロテスタントイズムでは、牧師は「罪」を許すとか、許さないとか判定する権能を欠き、信者個人の「良心」が、直接神と向き合う。このためカズイストリー発生 of 始原条件を欠除する。カズイストリー、その変形たる「ケース神学」がジャーナリズムと結びつく。その発生したいくつかのメディアが紹介されている。香内は、カズイストリーから「人生相談」「身上相談」への移行の過程を見出す。ときに、のちメディアの重要な読者収集装置である。

香内は本書のまとめの部分で、とりたててダニエル・デフォーに割いており、興味深い。デフォーは、小説『ロビンソン・クルソー』で後世に名を残すが、小説を書き出すのは50歳代後半で、むしろそれ以前は、ビジネスや政治的言論に手を染めていて生ぐさい著述家で、

『最近出されたあるパンフレットについての若干の考察』と題するパンフレットで政治的意見を吐いている。アメリカのデフォー研究者J.リチュッティの表現を借りれば、デフォーはPamphleteer（小冊子作者）で、デフォーに代表される無数の政治的文書が舞い上がった時期である。デフォーは一部は政府と秘密に通じて、多数のパンフレットを「量産」し、政治的成否はともあれ、小冊子で言論を全うすることの可能な、ある種のイギリス的言論の自由の伝説を組み込んでいる。そこへ、「近代的な『嘘』の世界」の凝縮のような「小説」、「フィクション」の進出は疑いようもなく、「読者層」に「下層」の人々をどんどん呑み込んでゆく。それはまさにしく、近代的な「読者」の誕生であった。

#### あとがき

香内の各論文に書き込めないエトスは、「あとがき」に詰め込まれている。第一は、やや短絡的に要約すれば、人間コミュニケーションの基本である「五感の形成は世界史」という問題。宗教・信仰に言及しているから「六感」のコミュニケーションであるともいえる。ここで「読む」ことの優位性が立証される。第二は、東京経済大学にコミュニケーション学部が生まれ、香内は、「コミュニケーション史」を担当するが、「人間のふつうの会話と各種メディアのコミュニケーションとを一望の下に収める」ということで視界が広がり、諸媒体混合の世界から「新聞」が抜け出す過程を展望することになる。第三では、「世俗化」した哲学者トマス・ホブズをとりあげ、異質のメディア群から「活字」が抜きんでてゆく様相を論証する。第四では、デフォー等を手かがりに、「事実」と「フィクション」の区別、そこから多数の人々を読者に取り込んでゆく「近代小説」、それにまつわる「近代的ジャーナリズム」の奥底に光をあてた。香内もいうように、「ピューリタン革命期の言論、メディア状況の軸」になったとする、近代的コミュニケーションの前段階の研究を作り上げた。国際的にも未踏の金字塔であり、香内三郎に対して本研究科が博士（コミュニケーション学）を授与するのに適切であると審査委員全員が判定した。

2005年2月16日

審査委員 (主査) 田村紀雄  
有山輝雄  
長谷川輝夫